

精神科病棟における思春期患者への対応を考える

— 発達課題に関する文献を通して —

1 階東病棟

○大石 恵理 尾崎千代美 島 佐和子

北村 愛

I はじめに

私達が日頃思春期の患者達と接していて、一番対応に戸惑うのは、「することがない」「たいくつな」という訴えである。彼らは、自分で考えて行動することができない。自分の時間がうまく使えない。「何がしたいのか」と逆に看護者から質問を投げかけても答えることはできず、「わからん」「何かすることない？」と他に依存してくる。そして病棟で決められた日課は十分に守れず、自分の気が向かない時などは日課に参加せず、自分勝手に気ままにすごすという、自己中心的な行動態度が目につく。

彼らの言動を見ていると、どうしてこんなことが守れないのか、何故それががまんできないのか、と看護者側からみると極めて容易に解決できると思われる問題行動が多い。これは思春期のみならず、その前段階の学童期で獲得すべき発達課題が十分に得られていないからなのではないかと思われる。

人間はそのライフサイクルにおいて、それぞれの時期で様々な発達課題を達成し、獲得していかなければならない。また、その時期の発達課題を獲得するためには、その前段階で得た能力を使わなければならないため、前段階での課題を獲得していることが必要条件である。

そこで私達は、病棟生活における思春期患者の問題点をまとめ、思春期及びその前段階である学童期にはどのような課題があげられているかを理解した上で、今後患者に対してとるべき態度や接し方を文献を通じて見直していきたい。

II 研究方法

この研究を行うにあたって私達はまず、思春期及び学童期の発達段階と発達課題を文献より学んだ。次に思春期患者の病棟生活における問題点をまとめ、それらに対して自分達が行ってきた看護を振り返り、今後のすすめ方について話しあった。そして思春期に関する他の文献を参考にしながら今後の対応について考えた。

III 結 果

精神科病棟に限らず、人と接する場合その人の成長発達をよく理解したうえで対応することが大切である。そこで私たちは、成長発達の段階及び各期における発達課題を理解する資料として、エリクソンの情緒的、社会的発達による8段階の区分をもととした、ニューマン夫妻の発達段階を参考にした。ニューマン夫妻の発達段階は、エリクソンが青年期として1つにまとめている段階をさらに青年前期、青年後期と2つに分けて論じており、9つの段階としている。

資料 I

心理社会的段階の発達課題

(バーバラ・M・ニューマン、フィリップ・M・ニューマン：生涯心理学³⁾より.)

乳児期 (誕生～2歳)

1. 社会的愛着
2. 対象の永続性
3. 感覚運動的知能と原始的因果関係
4. 運動機能の成熟

歩行期 (2歳～4歳)

1. 自己統制
2. 言語の発達
3. 空想と遊び
4. 移動能力の完成

学童前期 (5歳～7歳)

1. 性役割同一視
2. 初期の道徳性発達
3. 具体的操作
4. 集団遊び

学童期中期 (8歳～12歳)

1. 社会的協力：同性仲間集団
2. 自己評価
3. 技能の学習

4. チームプレイ

青年前期（13歳～17歳）

1. 身体的成熟
2. 形式的操作
3. 仲間集団の成員性
4. 異性関係

青年後期（18歳～22歳）

1. 両親からの自律
2. 性役割同一性
3. 道徳性の内在化
4. 職業選択

成人前期（23歳～30歳）

1. 結婚
2. 出産
3. 仕事
4. ライフ・スタイル

成人中期（31歳～50歳）

1. 家庭の経営
2. 育児
3. 職業の管理

成人後期（51歳～）

1. 新しい役割と活動へのエネルギーの再方向づけ
2. 自己の人生への受容
3. 死に対する見方の発達

人間が生まれて、人として成長していく上で大切な心理的な影響の多い時期は学童期であり、学校や社会生活をはじめ多くの人とのかかわりの中で成長発達がすすむ。私達の研究の対象とする学童期・青年期の発達段階においても、家庭や学校あるいは社会の中で生まれていく種々の要素についてとりあげられている為、同意するところが多く、この本の発達段階

を理解したうえで研究をすすめた。

資料からもわかる様に、道徳性や集団については、心理社会的段階の発達課題として、学童期と青年期の各期でとりあげられている。

学童期の道徳性とは、善悪の区別を認識し、自分の行動をコントロールすることができるということであり、これが青年期になるとより複雑な物事について道徳的判断ができるようになる。

また集団については、学童期では子供は集団遊びに参加することによって、仲間との協力や相互作用を経験し自分とは違う考えを持った他者の存在に気付く。これが青年期になると、仲間集団はより構造化、組織化され、集団を評価し自分によりふさわしい集団とのつながりを求めるようになる。またこれは、成人期における社会集団の成員性に先行するものである。

学童期に主に発達する遊びが、青年期には集団の中の成員性へと発達することをはじめ、学童期に確立できない要素はほとんどが青年期に確立すると言って良いと考えられる。学校生活というひとつの大きな社会生活の始まる学童期は、心理的にも複雑である。家庭以外の多様な影響力を受ける環境の場となる。

以上述べた様に各期の発達課題はそれぞれが密接なかかわりを持っており、前段階の課題を基礎とした上に、さらにそれを複雑化し、展開していくことが考えられる。したがって青年期の患者と接していく為には、青年期の発達段階のみならず、その前段階である学童期の発達課題が達成できているかどうかを把握しておく事が重要となってくる。

当病棟の思春期患者の病棟生活における問題点を考えてみると、以下のことがあげられる。

1. 起床時刻、消灯、就寝時刻が守れないことによる生活のリズムの乱れ
2. 私物が多く整理整頓ができないという環境整備、清潔観念の欠如
3. 間食が多く、病院食が充分にとれないという食生活の乱れ
4. 離院、無断外出に近い問題行動、長時間の病棟不在
5. 他患との交流において好き嫌いがはげしく気に入らない患者との同室を極端に嫌がる
6. 自分の行動に注意、指導を受けると反発をし感情的となりやすい、他者に責任転嫁してしまう
7. 服薬に対し拒否、抵抗感がある
8. 医療者との関係において家族関係の代行友達関係を望む

以上の問題点より目立つことは、「自己中心的」「依存的」行動である。

この様な思春期患者に対して私達は、常に規則正しいできる限り充実した生活がおくれるよう援助してきた。日課への参加を許可されている患者は、ラジオ体操、レクリエーション等に積極的に誘い、好癖的になったり自室にこもりきりになったりすることのないように気をつけた。また、時間を持て余してたよってくる患者に対しても看護者が“こうすればいい”と答えを出すことはせず、どうしてそのような訴えをしてくるのかを理解したうえで、患者自身が何をしたいのかを一緒に考え、できるだけ患者の行動に自己認識、責任を持たせる方向に働きかける様努めている。

IV 考 察

現在わが国では、発達加速現象と呼ばれる体位の向上や第二次性徴発現の低年齢化が問題となっている。これは言い換えれば、幼児期、学童期の短縮であり、子ども達は幼児期、学童期の発達課題をじっくり達成する間もなく思春期に入るという状況におかれている。しかし、身体成熟が早まっているにもかかわらず、現代社会の中で独立した社会人として生活するための社会的経験を身につけ一人前の大人とみなされる時期、つまり青年期の終期は逆に先へと伸びており、青年期の延長という現象がみられる。このため、早く青年期に入るにもかかわらず、20代になっても独立した成人としての役割や責任を持たない若者が増加している。したがって、このような状況の中でどのようにしてそれぞれの時期の充実をはかり、自我及び社会性の健康な発達を保証していくかが大きな課題となる。

また、今後私達が入院してくる思春期の患者にかかわる場合も、患者がどのような幼児期、学童期をすごしてきたかという生育歴、また家庭生活や家族関係、家庭におけるしつけのあり方などを情報収集することが大切である。そして、その患者が現在発達段階のどの時期にいるかを理解し、個々の患者に応じた指導計画を立て、接して行かなければならない。また、病棟日課などの計画立案の際は、患者自身を参加させ、患者に責任と自覚を持たせることが重要である。

私達は患者指導の最終目標を退院後の社会復帰と考え、入院によって妨げられる家庭生活及び学校、職場などの社会生活にかかわるものを入院生活の中で経験させ、入院中にも社会性を学べるということを重視している。そのために、病棟という社会の中で、その一員として最低のルールが守れ、他者とのかわりの中で社会人として生活していけるよう援助していかなければならない。

V おわりに

今回の研究は、文献学習と問題点の見直し及びその対策を考えるまでにとどまり、実際に看護を行い評価することができなかった。しかし、大人と子どもとの間で揺れ動く思春期の特徴を理解する良い機会であった。学習で得た知識を今後の看護にいかして行きたい。

VI 参考文献

- 1) E. H. エリクソン：幼年期と社会，みすず書房，1980
- 2) 波多野完治：ピアジェ理論と自我心理学，国工舎，1983
- 3) バーバラ・M. ニューマン，フィリップ・M. ニューマン：生涯心理学，川島書店，1980
- 4) 依田新也：青年期の発達の意義（現代青年心理学講座3），金子書房，1973
- 5) 依田新也：青年期の性格形成（現代青年心理学講座4），金子書房，1973
- 6) 加藤隆勝：思春期の人間関係，大日本図書，1984